

Japanese Calligrapher
書家



KASHUŪ

佳萩

伝統文化が好きだからこそ 海外にも伝えたい“書道”

「小学生の時に“将来、海外で書道を教えたい”と言っていたみたい。“あっ、夢が叶っている”と気づいて嬉しかった」

移住から18年経ったイギリス・ロンドンでの生活を振り返り、こう話した佳萩。現地での書道教室には、日本文化への関心が高い様々な国の人や、海外生活が長い在英の日本人が通っているという。

また、ロンドンの王立植物園『キューガーデン』での4mの大字揮毫や、ヨーロッパ・中東など世界各国で行われるイベントでの書道パフォーマンス、商品デザインの創作など、その活動は多岐にわたる。



「20歳の時、日本には20年間住んだから“海外も知りたいな”と思って色々な国で暮らすようになった。一方で、日本の伝統文化が大好きなんです。海外の人たちは書道の事を‘書’の部分、“単純に文字を書くアートだ”と思っている人が多い。日本特有の精神、‘道’の部分の理解は難しいんです。心を落ち着かせ墨を磨る、道具を丁寧に扱う、敬意を払うといった、日本人には当たり前のことも見せています。クライアントに対しても“書道は‘心’が無くて書けるものではない”という価値あるものにした いし、価値に合った仕事をしたいと思っています」

令和六年の年始は合志市で過ごした佳萩久しぶりの帰省中も創作活動は続いていた

型にはまらず「無為自然」

「私は会社勤めをしたことがないし、できるタイプでもない。日本では“変わってる”と言われていたけれど、今はそれが私の価値になって役立っている。ラッキーだったと思っています」

始めるまでに時間はかかるが、一度始めると止まらない、という佳萩。“書家としての活動は、日本にいたらやっていなかった”と話す。中国古代の思想家・老子は、作為なく自然に生きることを良しとした。無為自然な生き方を貫いてきたからこそ、ロンドンを拠点に活動する今があるという。

「人は、言い訳というか、やれない理由を探すところがあります。“今はちょっと…”とか“お金を貯めたら”とか。もちろん人生ではそういうこともありますけど、ちょっとだけやってみたら運命は絶対に動くし、本当にやりたかったことをやれば、それが正しい道になると思っています」

